

不幸は、本当の友人でない者を明らかにする。

——Aristotelés [B.C. 384 – B.C. 322]

雨脚は強くなっていた。

山荘側に面した海から聞こえる波音も騒がしい。

空はすっかり灰色で、先程まで夏の陽射しを主張していた太陽は、どこかへ息をひそめてしまった。

——雷鳴。

4人の体が咄嗟とつさに縮こまる。それでも、それどころではないといった様子で山荘の扉を開く。

空調の効き過ぎた部屋の空気が、体温を出し抜けに奪う。

シャツの裾を絞ったり、額ひたいに貼り付いた髪を払ったりする。

高校生らしく「ぎゃあぎゃあ」と互いの健闘を讃えながら。

それは、突然の雨だった。

台風は遠い海上を横切るはずだった。

呑気に海釣りに興じていた4人にとって、不意打ちの豪雨はアトラクションのように思えたし、いかにも高1の夏休みなアオハル体験だとはしゃぎながら走った。

水着の上からTシャツをひっかけただけで、寒くもなかった。

「あー、疲れた」

とマリーがさして疲れていなさそうに笑う。

「いやマジで、天気予報って都会向けの情報なんだな」

アキラが肩から掛けていたクーラーボックスを下ろす。残念ながら魚は入っていない。

「空が……、うん。泣いているんだね」

ジョニーが見上げるような仕草をするが、山荘の中から空は見えない。

「うんうん。空は泣き虫だよなあ」

ミュキはつけまつげの収まりを気にしていた。

4人がサンダルを脱いで室内に上がろうとする。全身が濡れていて、歩きたびに水たまりを作ってしまったようだ。

「おい！ サトシ！ ユージ！ どっちでもいいから何か拭くもの持ってきてくんねー？」 山荘の奥に向かってアキラが叫ぶ。

返事はない。

マリイが思い出したように言う。

「あ、寝てるのかな？ そういやサトシは寝るって言ってたけど」

「ユージもお昼寝？ 2人ともおこちゃまでちゅね〜」

ミュキは眉根まゆねを寄せて首をかしげる。

「しゃあねえな」とボヤいたアキラが躊躇ためらいなく奥へと歩んでいって、人数分のパスタオロをかかえて戻ってきた。

「サンクス・マイ・サー」ジョニーが長い金髪を掻き上げる。

「イエス・マイ・プレジャー」と応じたアキラは短髪で、一足先にざっと水分を拭ぬぐい終え

ると、濡らした床を拭く作業に移っていた。

「つーか、どうせ風呂入んだから、誰か一人は拭かなくてもよかったな」

雑巾がけの姿勢でアキラが言った。

これにはミュキが反論する。

「そう単純な問題では無いのだよアキラ君？ 君は女というものをもっと学び給へ」

「そうか。面倒だな」

言ってアキラは雑巾がけの姿勢で奥へと駆けていった。

「おいおいおい、今のゼロ点じゃない？ ねえ？ どうですかマリーさん？」

ミュキがエアアのマイクを差し出す。

「ゼロっていうか、んー、……マイナス100点？ 一般的には」

マリーが微笑んで答える。

「あれで保育士目指してるってんだから心配になるよあたしゃ」

ミュキが肩をすくめる。ジェスチャーでマリーを見やる。

「保育士は女の面倒は見ないんだよ」奥からアキラの声がした。

「ははっ、こいつはグッドなパンチラインだね！」

大げさに手を叩いて笑う。ジョニーの後頭部をミュキが叩いたのを見て、マリーが「ぶ

へっ」と噴き出した。

「んで、どうする？ 風呂、誰から使う？」アキラが訊いた。

「アキラが入ればいいよ。一番早そうだし。次がマリーでその次がわたし。んで最後にジョニー。髪の毛の短い順」

「ミュキがそれでいいなら私もオッケー。ところでき、先にサトシとユージ起こしちゃうの？ お腹もすいたし、ご飯係のサトシが寝たら晩ごはん始めらんないよ」

「確かにそうだね。腹が減っては夢も語れぬ、ってね」

「あらかた身体を拭き終えた4人は山荘のリビングを抜けて、奥の寝室へと向かった。

「おーい朝だぞう」ミュキが扉を開ける。

だが、そこには綺麗に整えられたベッドがあるだけで、2人の姿はなかった。

「あり？ どこいった？」

「きつとどこかで2人で仲を深めているんだよ。なんだっけ、ほら、イヤホンガンガンゲーム」

「2人で？」

「行くぞ」と言うアキラにミュキとジョニーが「はい」と手をあげて、寝室の隣のオーナールームへと向かう。

アキラがオーナールームの扉を開く。

その時、カッと眩い光が目飛び込んだ。遅れて雷鳴が轟く。

反射的に閉じた瞼をゆっくり開くと、ユージの背中が見えた。さらに奥には横長の執務机がある。そして、ユージの影に隠れて、机の上から人間の片足がだらりと垂れていた。

それは紛れもなくサトシの体で、机の上には仰向けのサトシが倒れていた。サトシを中心にして、トマトジュースをぶちまけるように血が広がっている。粘質の赤い液体が机の縁から、ぼたり、ぼたり、と滴を溢れさせている。

誰も声が出なかった。

ユージがゆっくりと振り向く。

右手には包丁が握られている。サトシが持ってきたものだ。

刀身の刃元まで血に染まっており、ユージの上半身も同様に、べつとりと血で濡れていた。

「ユージ、お前、なんで……、こんな」

アキラが喉の奥から絞り出した。

ユージは静かに目を伏せてから言う。

「なんで……？」

4人は次の言葉を待つよりなかった。

雨と風と波の音が騒がしい。

それでも、この部屋だけは、生唾を飲み込む音すら鮮明に拾い上げる静寂が支配していた。

「なんで……、そう、うん………」

灰白い雷影がユージの横顔を照らした瞬間、ユージは笑っているように見えた。

【STOP!】

一度手を止めて、次のページをめくらないようにしてください。

全員がここまで読み終わったら、話し合ってからプレイするキャラクターを選択してください。選択できるキャラクターは次の5人です。

- アキラ
- ジョニー
- マリー
- ミユキ
- ユージ